

山梨
アートプロジェクト



Yamanashi Art Project

2020(令和2)/2021(令和3)年度



種をまく 世界がひらく

山梨県立美術館

Yamanashi Prefectural Museum of Art

山梨アートプロジェクト

2020（令和2）/2021（令和3）年度



種をまく 世界がひらく

山梨県立美術館

Yamanashi Prefectural Museum of Art

ごあいさつ

「山梨アートプロジェクト」とは、アーティストが作品制作をとおして「山梨」の新たな解釈を行い、アートを介した美術館と地域の新たな繋がり創出を目的とした事業です。一つのプロジェクトは2カ年度に渡って行われ、第1年度には「プレイベント」として、国内外で活躍する山梨ゆかりのアーティストを招聘し、美術館の敷地内でサイトスペシフィックな作品公開や関連ワークショップなどを開催します。そこで扱ったテーマなどを受けて、第2年度には指定された場所で展開するアートプロジェクトのプランを募集し、審査員が選考したプランに基づき、アーティストが制作・公開を行います。

初開催となった2020（令和2）年度には甲府市出身のアーティスト開発好明氏をお招きし、当館ミュージアムコートで作品《テーブルズ》の発表、関連ワークショップの開催をしていただきました。地域の人々がさまざまな方法で《テーブルズ》という場を使うことで、美術館と地域の新たな繋がりが多く生まれました。また、長年甲府市内で滞在型制作活動の場を運営してきた坂本泉氏（アーティスト・イン・レジデンス山梨 [AIRY] 代表）による講演会も開催し、山梨のアートシーンの幅の広さを再確認す

ることができました。

続く2021（令和3）年度には当館敷地内の北池とミュージアムコート、そして甲府駅北口にある甲府市藤村記念館で展開する3つのプランを募集しました。審査の結果、北池では深澤孝史氏の《道祖神リプレゼンテーション》、ミュージアムコートでは藤原隆洋氏の《In the Wind》、甲府市藤村記念館では宇田奈緒氏の《不在の中の在-Presence in the Absence-》が選ばれ、各所で作品公開およびワークショップなどが行われました。また募集の際にはアーティスト・イン・レジデンスの希望も募り、宇田氏はAIRYに滞在しながら制作をしました。各作家はそれぞれの視点から山梨の歴史や文化を掘り起こし、作品をとおして地域の人々とのさまざまな縁を生み出しました。

最後になりましたが、本プロジェクト開催にあたって、ご協力いただきました関係各位に対しまして、心から感謝申し上げます。

2022（令和4）年

山梨県立美術館

館長 青柳 正規

Foreword

“Yamanashi Art Project” was launched with two purposes; one, for artists to create a new interpretation of “Yamanashi” through their work, and two, for our museum and the community to create new ties with one another. One project is carried out across two fiscal years. On the first year, as a pre-event, an internationally active artist with some connection with Yamanashi is invited to create a site-specific work on museum grounds and hold related workshops. Themes explored during this time are carried onto the second year, where a call for project plans that will take place in designated areas is made. Judges determine which plans are to be carried out, and the chosen artists create and present their work to the public.

In the fiscal year 2020, we invited Yamanashi native artist KAIHATSU Yoshiaki, resulting in the work *Tables*, which was shown in Museum Court, and related workshops. People in the community also used the work in various ways, generating new connections. We also invited the director of Artist in Residence Yamanashi [AIRY] SAKAMOTO Izumi, who has for many years provided a place for artists to stay and work in Kofu city, to hold a speaking event. This led to a newfound understanding in the wide range of artistic activities in our prefecture.

In the following fiscal year of 2021, we called for project plans for three areas; Kitaike (North Pond) and Museum Court, which are on museum grounds, and Kofu City Fujimura Memorial Hall, which is located near the north exit of Kofu station. The following three were chosen by the judges: *Dosojin Representation* by FUKASAWA Takafumi for Kitaike, *In the Wind* by FUJIWARA Takahiro for Museum Court and *Presence in the Absence* by UDA Nao for Kofu City Fujimura Memorial Hall. The projects were carried out in their respective areas, as well as related workshops. Calls to stay at an artist-in-residence were also made, which led to Uda staying and working at AIRY. Each in their own ways, all three artists unearthed the history and culture of Yamanashi, and through their work created new ties with people within the community.

In closing, we would like to express our sincerest gratitude to everyone who contributed to make this project possible.

2022

AOYAGI Masanori

Director, Yamanashi Prefectural Museum of Art

Contents

2 ごあいさつ

山梨アートプロジェクト 2020 (プレイベント) —————

4 開発好明《テーブルズ》

10 坂本泉 講演会「私たちが風景です」～山梨でアートの種をまく～

山梨アートプロジェクト 2021 —————

11 山梨アートプロジェクト 2021 概要

12 深澤孝史《道祖神リプレゼンテーション》

18 藤原隆洋《In the Wind》

24 宇田奈緒《不在の中の在—Presence in the Absence—》

30 座談会

31 審査員コメント

32 あとがき

33 奥付

山梨アートプロジェクト 2020 (プレイベント)

開発好明 《テーブルズ》

会期／2021(令和3)年2月6日(土)～3月21日(日)

場所／ミュージアムコート

さまざまな形状のテーブルが並び、不思議な場がミュージアムコートに展開された作品《テーブルズ》は、「地域の繋がり」をテーマにした。まず、集められたテーブルはかつて誰かの家の中で使われていたもので、各家庭の思い出が刻まれていた。本企画に賛同くださった方々の想いのこもったテーブルも集い、作品をとおした新しい縁が生まれた。《テーブルズ》を使った多種多様な活動も行われた。作家本人によるワークショップは、作家と参加者が直接交流する機会となり、また地域の人々が《テーブルズ》を各々の活動で使ったことで、多くの出会いや繋がりが生まれた。人間同士の接触や交流が著しく困難になっていた時期において、人と人の繋がり的重要性を問いかけた作品となった。

Tables by KAIHATSU YoshiakiPeriod: February 6th – March 21st, 2021

Venue: Museum Court

In *Tables*, tables of many shapes and sizes were placed in Museum Court, creating a curious atmosphere. The theme of the work was “connecting with the community”. First, the gathered tables were ones that were formerly used in homes. Some tables were brought in by people who were interested in the work, creating new connections through the process. Second, *Tables* was also an artwork that was intended to be used. Related workshops held by the artist became opportunities for the artist and participants to interact with one another. Also, people within the community used *Tables* in various ways, leading to new ties and connections. At a particular time in history where human interaction was extremely difficult, *Tables* explored the importance of human connection.



《テーブルズ》について

開発好明

山梨県立美術館の山梨アートプロジェクトに作家と審査員として参加させていただいた。

僕の場合は美術館の敷地からのチョイスとなった。地域との交流が主軸に置かれていたので、サイトスペシフィックな作品でありつつ、その作品によって地域とどのような関係を生む事が可能なのかを考えつつアイデアを絞っていった。

最終的に発表した作品は《テーブルズ》と言い、さまざまな形のテーブルをミュージアムコートに設置した。まず最初の交流はテーブルを提供してくださる方を募り、幸い数台のテーブルが運び込まれた。次は、会期中に並べられたテーブルを解放して自由に使っていただいた。僕は、椅子の排除された本来の機能が不十分なテーブルが集まり、そこで新たな発想が生まれテーブルに荷物を置いて立ち話をするもよし、ランチを食べるのもよし、テーブルの下を潜って追いかっこが始まるのもまた良かった。僕の意図する事以上にその場に变化や体験が生まれる事をこのテーブルズをきっかけにしたかったし、契機に生まれた現象そのものが作品と言えた。

Profile



*

開発 好明 (かいはつ・よしあき) KAIHATSU Yoshiaki

山梨県生まれ。「越後妻有 大地の芸術祭」(2006年他)、「いちばらアート×ミックス」(2014年他)、「あそびのじかん」(2019年、東京都現代美術館)、ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展日本館「おたく：人格＝空間＝都市」(2004年)、「ベルリンー東京、東京ーベルリン」(2006年、ニューナショナルギャラリー、ベルリン)などのグループ展に参加する他、市原湖畔美術館では大規模個展「開発好明：中2病」(2016年)が開催されるなど、国内外で参加型の作品を中心に発表している。2011年の東日本大震災後には移動型展覧会と募金活動を組み合わせた「デイリリーアートサーカス」を立ち上げた。観覧者参加型の作品を中心に制作しており、アートをととした作家と観覧者、あるいは観覧者同士の繋がりを探る作品を多く手掛けている。



《テーブルズ》展示作業

さまざまな形状のテーブルをミュージアムコートに並べた。



地域の皆様からもテーブルを募った。
ご提供の際には、テーブルにまつわる思い出をお話いただいた。



／ 《テーブルズ》関連ワークショップ ／

workshop

パッチワークでテーブルクロスをつくろう！

〔講師〕 開発好明氏(展示作家)

〔日時〕 2月6日(土)、7日(日)、13日(土)、14日(日)、20日(土)

①午前11:00～12:00 ②午後1:00～2:00

〔場所〕 図書室前、ミュージアムコート

〔対象〕 どなたでも

〔参加者数〕 合計86人

本作で設置したテーブルに合わせてテーブルクロスを制作するワークショップを複数回開催。テーブルクロスを置くためのテーブルをそれぞれ選び、気に入った布を縫い合わせて各自テーブルクロスを作った後、出来上がったテーブルクロスをテーブルに置いて、参加者全員で鑑賞した。県内の親子、大人、大学生など、地域の様々な方が参加し、《テーブルズ》が毎回異なる趣となった。



テーブルクロスを置くためのテーブル選び



テーブルクロス制作



テーブルクロス
を
テーブルに置いて鑑賞

《テーブルズ》を使いました！

会期中は地域の人々が各々の活動で使うことで、
《テーブルズ》は人々が集い、交流する場へと発展していった。



① 3Dペンで花を！

3Dペンで制作、作品展示を行った。

[活動期間] 2月11日(木・祝)～2月17日(水)

[活動者] 専門学校サントクノカレッジ マルチメディア科
グラフィックデザインコースの学生の皆さん



② 《テーブルズ》で制作！

折り紙をする、絵を描くなどの制作を行った。

[活動期間] 2月14日(日)～2月17日(水)

[活動者] 山梨大学教育学部美術系の学生の皆さん



③ 二人の距離

サウンドとドローイングのパフォーマンスをとおして、テーマ
「二人の距離」を探った。

[活動日] 2月23日(火・祝)

(1) サウンドバージョン

楽器(鍵盤ハモニカ)の音で会話することは可能か実験した。

[活動者] ユニット「ともだち」/金亮子氏、坂本泉氏

(2) ドローイングバージョン

テーブルの上に立てたアクリル板へ、二人が両側から絵を描き、両者の遠慮、気遣い、大胆さ、破壊、共有、協力などを
探った。

[活動者] 大方岳氏(アーティスト)



④ テーブルにまつわる思い出

テーブルにまつわる思い出を短文に託して、テーブルの上に
設置した。

[活動日] 2月24日(水)、3月3日(水)、10日(水)、12日(金)、
16日(火)、17日(水)、20日(土・祝)

[活動者] 当館学芸員



⑤ 花と尺八、テーブルを囲んで

花と尺八のワークショップ、およびパフォーマンスを行った。

[活動日時] 3月9日(火) 午前の部:ワークショップ
午後の部:パフォーマンス

[活動者] 永宮仁志氏(フラワーアーティスト)、
高木亨氏(尺八奏者)



⑥ 自然に触れて、俳句をつくろう

芸術の森公園内で俳句を詠み、テーブルを使って互いに発表・鑑賞した。

[活動日時] 3月11日(木)10:00~12:00

[活動者] ひつじの会



⑦ 春の足音

《テーブルズ》関連ワークショップで制作したテーブルクロスを使って、パフォーマンスを行った。

[活動日] 3月14日(日)

[活動者] 鈴木つな氏(ダンサー)、
島津久美子氏(アーティスト)



⑧ 『彫紙アート』制作工程のご紹介

複数枚の色紙を重ねて絵柄を彫る「彫紙アート」の制作工程をデモンストレーションした。

[活動日] 3月14日(日)

[活動者] 五味増雄氏(彫紙アートインストラクター)

講演会

「私たちが風景です」 ～山梨でアートの種をまく～

講師／坂本泉氏（アーティスト・イン・レジデンス山梨 [AIRY] 代表）

日時／3月6日（土）午後1:30～3:00

場所／講堂

参加者数／23人

内容／前半はアーティスト・イン・レジデンス山梨 [AIRY] と甲府を中心に展開してきたアート活動についての講演。
後半は当館学芸員との対談をとおして、アートを始めたきっかけや、山梨でアート活動をする思いについてお話しいただいた。



— まず坂本さんご自身について伺いたいと思います。デザイン科に在籍した大学で、印象に残っていることはありますか？
大学というところで、芸術、アートを尊敬する生き方、そういうことは沁みついたのかなと思います。卒業式の時に学長が言っていたことで未だに覚えているが、「人生は短い、芸術は長い」。芸術の広さ、奥深さを語る、良いスタンスだと感じています。

— ご結婚後、1990年代のカリフォルニアに滞在されました。そこではどのようなアートに触れましたか？

大きいお家に招待されると、必ず巨大な壁に絵があって、とても衝撃を受けました。そして大きな街には子どもに焦点を絞ったミュージアムがあって、社会がそのような場所を提供していることも知りました。そして、クリストとジャンヌ＝クロードが《アンブレラ》をアメリカ西海岸と日本の茨城県で同時に発表していて、それを観た時は度肝を抜かれました。

— 帰国後、2005年にAIRYを創設。その一番のきっかけは何でしたか？

ダイナミックなアートを経験してしまい、10年間ほど何をやりたいのだろうと悶々としていたのですが、色々経験していたことをアウトプットしたい、若い人たちにも伝えたいという思いがありました。初めてアーティスト・イン・レジデンス (AIR) を知ったのは、2005年の横浜トリエンナーレにおいて、そこで茨城県守谷市にあるアーカス (ARCUS) というアーティスト・イン・レジデンスのチラシを目にしました。とても刺激的で、私が甲府でやりたいことはこれだと閃きました。

— AIRY滞在のアーティストは、初めての日本が甲府という人も多いと思うのですが、滞在者が甲府や山梨について語ったことで、印象的なことはありますか？

私は甲府で生まれ育ったので、その良さが見えにくいところがありました。滞在者は、「これぐらいコンパクトなのが良いんだよ」って言うんですね。小さいことの良さを知っているし、すごく楽しんでくれます。また、2012年のある滞在者は甲府のコミュニティは面白いと言って、私の知らない場所などを色々発見していました。その人は三月月の予定だったのですが、結局一年近く滞在しました。小さい街の楽しみ方について、彼女にすごく刺激を受けましたし、最近ではこの街、甲府を誇りに思い、小さい街での楽しみ方を提案したいと思っています。

※対談内容一部抜粋後、編集

聞き手：下東佳那（当館学芸員）

Profile



坂本 泉（さかもと・いずみ）SAKAMOTO Izumi

山梨県生まれ。大学卒業後、アメリカでの生活を経て、2005年に甲府市で山梨県初のアーティスト・イン・レジデンス（滞在型制作プログラム）であるアーティスト・イン・レジデンス山梨 [AIRY] を立ち上げる。国際的な新進アーティストと地元クリエイター等をつなぐアートの実験スペースとして運営を続け、2020年には15周年を迎えた。地域に開かれた、世界に繋がるアートの窓として、主に現代美術を介した交流の場を創出している。自らもアート制作を続けながら、次期AIRY運営者の育成に力を入れる。

*

Yamanashi Art Project 2021



2021 (令和3) 年度はアートプロジェクトプランの「募集・審査・制作・公開」を行いました。

プラン募集

- ・**展示エリア** 北池、ミュージアムコート、甲府市藤村記念館の3か所
- ・**募集期間** 2021年5月11日(火)～6月30日(水)
- ・**応募数** 北池: 14件 ミュージアムコート: 10件 甲府市藤村記念館: 14件

審査

- ・**審査員** 青柳正規(当館館長)
井澤英理子(当館学芸幹)
開発好明(アーティスト)
坂本泉(アーティスト・イン・レジデンス山梨[AIRY]代表)
平野千枝子(山梨大学大学院准教授)
向山富士雄(南アルプス市立美術館館長)
- ・**審査発表** 8月末

審査結果

- ・**北池** 深澤孝史《道祖神リプレゼンテーション》
- ・**ミュージアムコート** 藤原隆洋《In the Wind》
- ・**甲府市藤村記念館** 宇田奈緒《不在の中の在-Presence in the Absence-》

作品公開

- ・**会期** 2021年11月16日(火)～12月12日(日)
北池 深澤孝史《道祖神リプレゼンテーション》
ミュージアムコート 藤原隆洋《In the Wind》
- ・**会期** 2021年11月23日(火・祝)～12月12日(日)
甲府市藤村記念館 宇田奈緒《不在の中の在-Presence in the Absence-》

山梨アートプロジェクト 2021

深澤孝史

《道祖神リプレゼンテーション》

会期／2021(令和3)年11月16日(火)～12月12日(日)

場所／北池

作品制作にあたり、深澤は「道祖神芸術調査グループ」を立ち上げ、9名の調査員と4名の特別調査員とともに、山梨に根付く道祖神の信仰や文化を対象としたリサーチやフィールドワークを重ねた。調査員たちとともに、県内のさまざまな丸石神を調査し、道祖神にまつわる新たな表現や見方を生むための議論を経て、北池を「いしのまつりば」という場所へと変容させた。“まつりば”は、山梨の道祖神という奥深くも不思議な習俗と、そこから生まれた参加者による表現に出会う場となった。展示期間中は“まつりば”でイベントを実施する他、「道祖神しんぶん」を発行することで、制作をとおして道祖神の新たな解釈を生み出していった。

Dosojin Representation by FUKASAWA Takafumi

Period: November 16th– December 12th, 2021

Venue: Kitaike

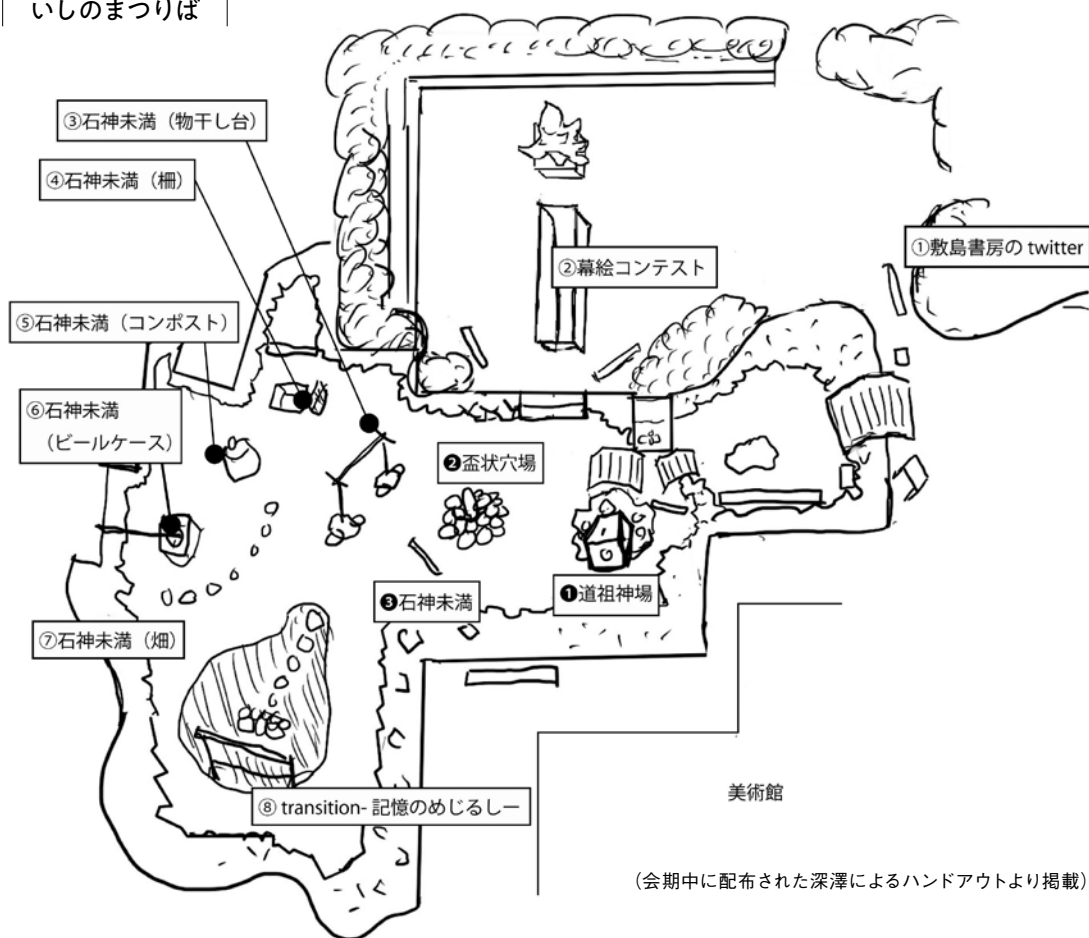
In creating this work, Fukasawa organized “Dosojin Art Research Group”, where the artist along with nine researchers and four guest researchers conducted research and field work surrounding the worship and culture of *dosojin* (guardian deity) in Yamanashi. The group examined various *maruishi-gami* (round stone gods) within the prefecture, and held numerous discussions on how to create new expressions and ways of seeing in relationship to *dosojin*. This resulted in transforming Kitaike to “Ishi no Matsuriba (Place for enshrining stones)”. The “Matsuriba” became a place where the profound but mysterious custom of the Yamanashi *dosojin*, and the new expressions which sprung from those customs meet. Events were held inside the “Matsuriba” during the exhibit period, and “Dosojin Newspaper” was published, leading to a new interpretation of *dosojin* through the creation of the work.

**

*



*



《道祖神リプレゼンテーション》について

深澤孝史

これまで私は10年ほど各地でアートプロジェクトを行なってきたが、今回はじめて山梨で活動できたが、最初から自分の生まれた土地で作品を発表したいという気持ちが強かったわけではなかった。さまざまな場所でたくさんの人と出会いながら、民俗や歴史や文化をリサーチし続けていくうちに、逆に生まれ育った山梨の輪郭が徐々に浮かび上がってきたのだ。例えば、茨城で佐竹氏のプロジェクトを行った時も、佐竹は追放された弟が武田として頭角を表していったつながりはもちろん、滞在させてもらった商店街の薬局の店長が波木井実長の末裔だという話になったり、大阪と兵庫の境の能勢でプロジェクトを行なった時も、能勢妙見山が西の身延山と呼ばれているだけでなく、そこでお世話になった住民の方がもともと私の母の実家の南アルプス市鏡中条出身で、私の祖父の教え子だったことがわかったりもした。今回はじめてプロジェクトを山梨で行ったと思っていたが、実は無意識のうちにどの土地にいてもずっと続けていたことに今回気がついたのであった。

Profile



深澤 孝史 (ふかさわ・たかふみ) FUKASAWA Takafumi

山梨県生まれ。国内外さまざまな場所でプロジェクトを実施。主なものとして、《New Town My Home Theater/ 信仰住宅地》(2019、のせでんアトライン)、《海をつなげる》(2019年、Reborn-Art Festival)、《Football field for buffalo》(2018年、THAILAND BIENNALE)、《かみまちハーモニーランド》(2018年、TURNLAND)《神話の続き》(2017年、奥能登国際芸術祭)、《常陸佐竹市》(2016年、茨城県北芸術祭)、《とくいの銀行》(2011年、取手アートプロジェクトほか) など。

いしの まつりば

「いしのまつりば」は、山梨特有の道祖神信仰の背景や、道祖神から生まれた表現や文化に巻き込まれることを目的とした道祖神のための公園です。

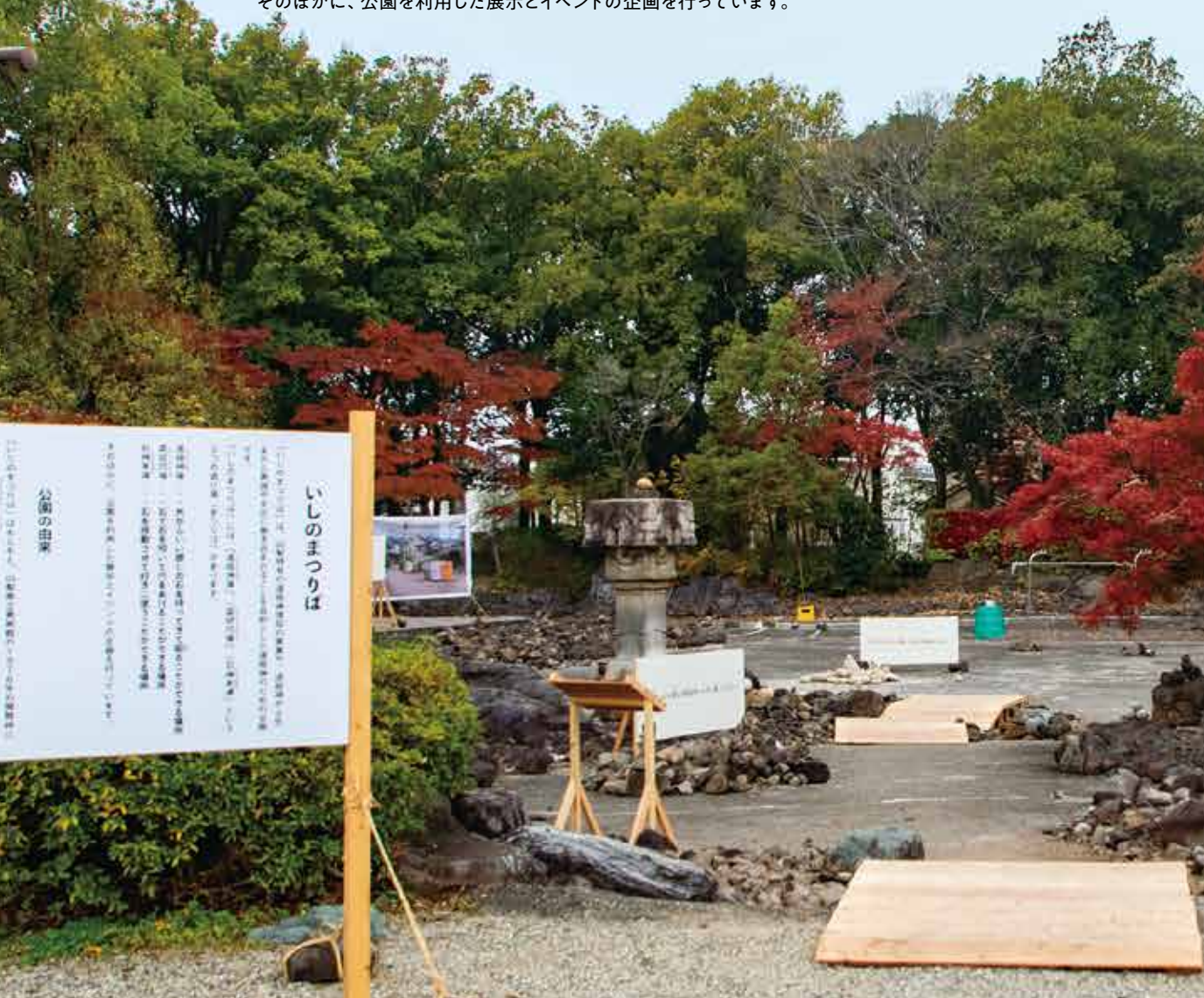
「いしのまつりば」には、「道祖神場」、「盃状穴場」、「石神未満」という3つの遊び場（まつりば）があります。

道祖神場・・・外からいい感じの石を持ってきて祀ることができる場所

盃状穴場・・・石を叩いて石にいい感じに穴をあけることができる場所

石神未満・・・石をいい感じに動かして遊ぶことができる場所

そのほかに、公園を利用した展示とイベントの企画を行っています。



公園の 由来

「いしのまつりば」はもともと、山梨県立美術館の1978年の開館時に彫刻家・流政之が灯籠と池をデザインし、「北池」として親しまれてきた場所でした。しかし、2011年3月11日の東日本大震災の影響で水を貯めることができなくなり現在の干上がった形となりました。そして、この度「道祖神芸術調査グループ」が水の枯れた北池を公園として再生することとなりました。山梨の道祖神信仰とは全く関係のないはずの北池ですが、水が干上がりたくさんの石が露出することで、期せずして山々と川に囲まれた盆地のような場所に変貌しました。それは、かつてさまざまな石の神を祀っていた場所が掘り起こされた後の遺跡のようにも見えます。調査を経て、山梨の人々がたくさんの石とともに何万年と暮らして培われてきた「いい感じ」の石を祀る感性と、「いい感じ」でない石でも「いい感じ」に活用する感性が、私たちと同調したことで北池の見え方が変貌し、道祖神の信仰や文化に巻き込まれることを目的とした道祖神のための公園に生まれ変わりました。

石神未満、丸石神、道祖神

山梨県には、地域特有の丸石道祖神があるが、住民は「いい感じ」の石を見つけると道祖神や屋敷神、その他さまざまな神様と一緒につつい祀ってしまう習性がある。「いい感じ」の石を見つけて神様にする才能がある。「いい感じ」の石が見つかるのは、「いい感じ」ではないその他大勢の溢れんばかりの石と日常的に生活しているからなのではないか。河原には流れ流れて角が削り落とされた石がいくつも転がっており、地面を掘ればごろごろ石が出てきて、畑を覗くと出番待ちの石たちがそこかしこに列を作っている。山梨県民が、「いい感じ」の石を見つけて神様になってしまう背景には、実は「いい感じ」の石でなくても、何万年の間、日用の道具として使い続けている蓄積があるのではないか。ちょっと散歩して路地や畑、庭先を眺めると、「いい感じ」に活用されている石たちを多く発見することができる。石が「いい感じ」でなくても、つつい「いい感じ」に活用してしまう様子を、今回「石神未満」と名付けてみようと思う。それはたくさんの山と川に囲まれた扇状地の地形の中で何万年もかけて、特有の感性として育まれてきたものではないだろうか。

「いい感じ」ではない石が「いい感じ」に活用される様子を「石神未満」と名付けてみたが、「いい感じ」であるはずの丸石神も本来は「石神未満」の特徴をそもそも宿しているのではないかとも思えてくる。山梨県には固有の丸石道祖神だが、なぜ丸石を道祖神として祀っているのかはいまだにわかっていない。しかし、北杜市大泉町の金生遺跡をはじめ、山梨の縄文遺跡からはいくつもの石棒や丸石が出土しており、道祖神ではないが、まるい石を祀るという精神性は少なくともその頃にはあったことがわかる。縄文遺跡があった場所に弥生の住居跡が見つかる例は少なく、住まわれなくなった縄文住居が土に埋もれていき、時を経てその遺跡の上に誰かが住み始める。そしてたまたま地面から丸石を掘り当ててびっくりして、新たな神として、時を超えて祀られたりもしたのではないだろうか。人間の営みに関係なく石は石の時間軸で生きていて、時々人間が石を見つけては勝手に祀ったり祀らなかつたりするという関係が続けていて、ある時になって丸石は道祖神として祀られるようになり、小正月や道祖神祭の芸能などさまざまな文化や信仰が集合・習合したり、途絶えたりしながら現在に道祖神信仰が続いているのではないだろうか。丸石は道祖神だけではなく、屋敷神や色々な神を祀っている石碑や祠の前にもたくさん祀られている。道祖神だけではなく、この地ではさまざまな神が丸石で表されていく。

近代に入ってから、近代以前のようなハレとケを重視する生活感覚が失われたことによって、丸石神も信仰心が希薄化しているという意味で石神未満化しているといえるかもしれない。もちろん今も祭をやっている地域は多く、道祖神の多くは地元の方々に大事にされている。しかし生活が変わり道祖神場は現在、ゴミステーションとして活用されたり、自販機群が並んだりもする。敷地の側にコンビニが立ち、道の拡張に伴い移設されたりもする。役目を終えて消えていくものもある。道祖神を媒介として集落の拠り所にしたり自然と呪術的な対話をするような感覚は徐々に失われつつある。しかし、石神未満化した道祖神を介して新たな関係を紡ぐ感性も生まれてきているのではないかと同時に感じている。それは生活や景色が人間の都合で変わっていても、石の変わらなさが私たちに気づきを与えてくれている。人間の都合で勝手に祀られている石たちが、気に留められなくなっていくことで、逆に「今」を重視しすぎる人間の時間軸を超えた存在としてもう一度浮かび上がりはじめる。本質的に石は人間とは無関係であるという意味で「神未満」であることが、私たちが石を神とみてしまう条件となっていることに気づく。そしてそうした新たな感性がこの地に培われるのも、もともと対話の難しい石や丸石神や道祖神との「いい感じ」な戯れを続けてきたからだと思っている。

道祖神芸術調査グループ

山梨の丸石神、道祖神と文化芸術の関係を横断的に調査するために、「道祖神芸術調査グループ」を立ち上げ、招聘した4名の特別調査員と公募で集まった9名の調査員とともに活動を展開。週1回のオンラインミーティングとフィールドワークを実施した。

活動期間：10月16日（日）～12月12日（日）

調査員：金丸貴臣（気功研究家）、小池準一（盃状穴研究）、
近藤朋希（服飾学生）、鈴木つな（ダンサー）、
芹沢昇（道祖神研究）、辻佑介（会社員）、
戸田圭亮（カレー店主）、
広瀬和弘（南アルプス市職員）、
渡辺俊夫（キュレーター）

特別調査員：中沢新一（思想家、人類学者）、
野沢なつみ（野生の科学研究所 研究員/リサーチャー）、
四方幸子（キュレーター/批評家/リサーチャー）、
本阿弥清（NPO法人環境芸術ネットワーク代表、美術家評論家連盟会員）

コーディネーター：石山律



*

道祖神芸術調査グループ集合写真

道祖神フィールドワーク

10月30日（土）、31日（日） 両日 9:00-16:00

10/30

山梨市七日市場道祖神場他リサーチ
山梨県立博物館 丸尾依子学芸員レクチャー聴講



山梨市七日市場道祖神場リサーチ



山梨県立博物館 丸尾依子学芸員レクチャー聴講

10/31

甲斐市宮地地区道祖神場、屋敷神リサーチ
敷島書房見学
金生遺跡・北杜市考古資料館見学（ガイド：長谷川誠学芸員）
山梨県立美術館北池にて振り返り



*

甲斐市宮地地区道祖神場リサーチ
神崎さん宅で発見した丸石



金生遺跡見学

／ 《道祖神リプレゼンテーション》関連ワークショップ ／

workshop

どうそじんを作ってみよう

〔講師〕 深澤孝史氏(展示作家)
 〔日時〕 11月28日(日) 午後1:30～
 〔場所〕 北池、工房
 〔対象〕 どなたでも
 〔参加者数〕 15人

道祖神では、神を祀る小さな殿舎である祠ほこらが丸石を覆うように、あるいはその隣に設置されていることが多くある。本ワークショップでは、様々な形の木材を使って、自分の家に設置するための祠をつくり、制作をとおして道祖神について考えた。自宅に持ち帰り、祠に「いい感じの石」を中に祀って完成した。



祠の制作



北池に設置

／ 「いしのまつりば」クロージングイベント ／

① 芸能発表 いしはおどる いしとまう

〔出演・踊り〕 鈴木つな氏
 〔演奏〕 白砂勝敏氏、ホンナミキヨシ氏
 〔衣装〕 近藤朋希氏
 〔日時〕 12月12日(日)
 午後1:00～2:00
 〔場所〕 北池
 〔対象〕 どなたでも
 〔参加者数〕 50人
 石と遊ぶ事前ワークショップや踊りの上演を「いしのまつりば」で行った。



*



② 映像上映

道祖神芸術調査グループドキュメント

〔日時〕 12月12日(日) 午後2:20～2:50
 〔場所〕 工房およびZoomオンライン
 〔参加者数〕 30人／Zoomオンライン15人
 道祖神芸術調査グループのフィールドワークやレクチャー、ミーティングなどのプロセスをまとめたドキュメント映像を上映した。

③ オンラインレクチャー

丸石神の人類学

〔講師〕 中沢新一氏(思想家・人類学者)
 〔日時〕 12月12日(日) 午後3:00～
 〔場所〕 工房およびZoomオンライン
 〔参加者数〕 30人／Zoomオンライン36人
 中沢新一氏をZoomオンラインでお迎えし、ご講演いただいた。

山梨アートプロジェクト 2021

藤原隆洋 《In the Wind》

会期／2021(令和3)年11月16日(火)～12月12日(日)

場所／ミュージアムコート

藤原は、自然の光景や現象など、自然物のエッセンスを人工物に置き換え、緻密な制作によって再現した。《In the Wind》では300本のミラー加工されたPP・PE*テープを屋上から張り、山梨の傾斜地に広がる葡萄畑を描き出した。晴天の日には青空が、曇天の日には白い雲が映り込み、そして風の日には眩しいほど光が反射するなど、テープの表面には空や周囲の様子が映り込み、風に吹かれて揺らめき、毎日違う情景を目にすることができた。葡萄畑がモチーフでありながらも、日々変化する作品には鑑賞者自身の中にある風景が投影されることもあったことだろう。この「ミュージアムコート」は、山梨の景観から生まれた作品を迎えることで、それぞれの風景と新たに出会う空間となった。

*PP ポリプロピレン PE ポリエチレン

In the Wind by FUJIWARA Takahiro

Period: November 16th – December 12th, 2021

Venue: Museum Court

In his works, Fujiwara takes the essence of natural things, such as natural scenery or phenomena, and replacing it with artificial material, painstakingly recreates nature. With *In the Wind*, 300 strips of reflective PP and PE tape were stretched from the rooftop, depicting vineyards that spread across the slopes of Yamanashi. With the sky or surroundings reflecting onto the surface of the tape, and the work swaying in the wind, the art presented a different scene each day; on sunny days the blue sky, and on cloudy days the white clouds reflected onto the work, while on windy days radiant light dazzled our eyes. Though the motif of *In the Wind* was vineyards, with the work changing from moment to moment, there must have been times where a scenery inside the viewer was reflected onto the art. With the installment of an artwork which was born from a Yamanashi landscape, Museum Court became a place where scenery from inside each and every one of us came together.

山梨アートプロジェクトを終えて

藤原 隆洋

私のインスタレーション作品は、性質上完全な形の設置は現場でのぶっつけ本番になることが多い。したがって毎回想定外のことが多少起きる。それは嬉しいこともあるし逆のこともある。《In the Wind》は、屋外だからこそ可能な表現にしようと、風に多くをゆだね周りの景色と光を取り込む作品とした。建物や地面、空の色がラインに反映するのは狙いだが、少し離れた黄金色に輝く紅葉まで及ぶとは考えていなかった。(まさか翌週に散ってしまうことも!) 想定外のことは聴覚にも現れる。ラインは揺れて互いにぶつかりと小気味よくパチパチ音をたてた。激しく鳴るかと思えば、急に風のように静まる。瞬時に変化する風にも驚かされた。屋外展示の面白さを知る貴重な機会となった。

ワークショップではユニークな描画技法を用いたが参加者全員初挑戦ながら大健闘。暗闇に大きく映し出した幻想的な作品の数々にぐっとこみ上げるものがあった。

関係者、ご覧いただきました方々に、心からの感謝を。

Profile



*

藤原 隆洋 (ふじわら・たかひろ) FUJIWARA Takahiro

愛知県生まれ。近年は、自然の光景や現象をアイデア源に、知覚を刺激し鑑賞者それぞれの「景色」や「時間」が生まれるような「想像力を誘う空間」をつくりだす作品を展開する。国内・海外の展覧会に多数参加。主な活動として、Scotiabank Nuit Blanche 2008 (2008年、トロント、カナダ) や CAFKA.09 VERACITY (2009年、キッチン、カナダ) の現代アート国際展への参加、「Somewhere」(2019-20年、下山芸術の森 発電所美術館) の個展。山梨県での作品発表に「蘇生する空間」(2010年、旧JRビル、甲府) や「trance veil」(2013年、山梨県立美術館エントランス) がある。

In the Wind

山梨の葡萄畑は、周囲の山々とともに四季折々に美しい景観を創り出し、目を楽しませてくれる。人為が自然の持ち味を損ねることは少なくないが、人為が自然と調和したとき、美しい風景となる。そのことを改めて感じられる作品にしたいと思った。

ここミュージアムコートは、美術館南館とレストランに挟まれた三角形の中庭で、公園へとつながる。私にはこの空間が、山々に囲まれ広がる甲府盆地の光景と重なり、傾斜地に広がる葡萄畑をモチーフにフォルムを描いた。

作品が生み出す様々な現象は、収穫前の葡萄棚下で感じた心地よい現象だ。屋根状に広がる大きな葉の隙間から差し込む眩しい日の光、照らしだされるたわわに実るぶどうの房、風で揺らぐ木漏れ日と葉陰。ミラーテープは、周りの景色を映し、光を反射させ、風によりテープは揺らぎ、1本1本不規則な動きを続け、光は波紋のように館内の壁面まで届く。

視線の高さや位置によって作品の見え方は変化し、時間帯や天気、風の強弱によっても様々な表情を見せる。青空と紅葉する木々が映り織りなすブルーとゴールドに輝く様はこの時期ならではの姿だろう。私の作品をきっかけに鑑賞者の方々の知覚や想像力を刺激し、ひとりひとりにそれぞれの「景色」が展開されることを願う。



／ 《In the Wind》関連ワークショップ ／

workshop

一人ひとりの思う風景を空間につくりだす

〔講師〕 藤原隆洋氏(展示作家)

〔日時〕 12月4日(土)午後1:30～

〔場所〕 工房、講堂

〔参加者数〕 18人

一人ひとりの思う空、雲をクレヨンや牛乳で描いた。出来上がった作品を撮影し、講堂で上映し鑑賞会をした。みんなの作品が暗闇に浮かび上がり、それぞれの思う空を共有する機会となった。



制作方法の
デモンストレーション

*

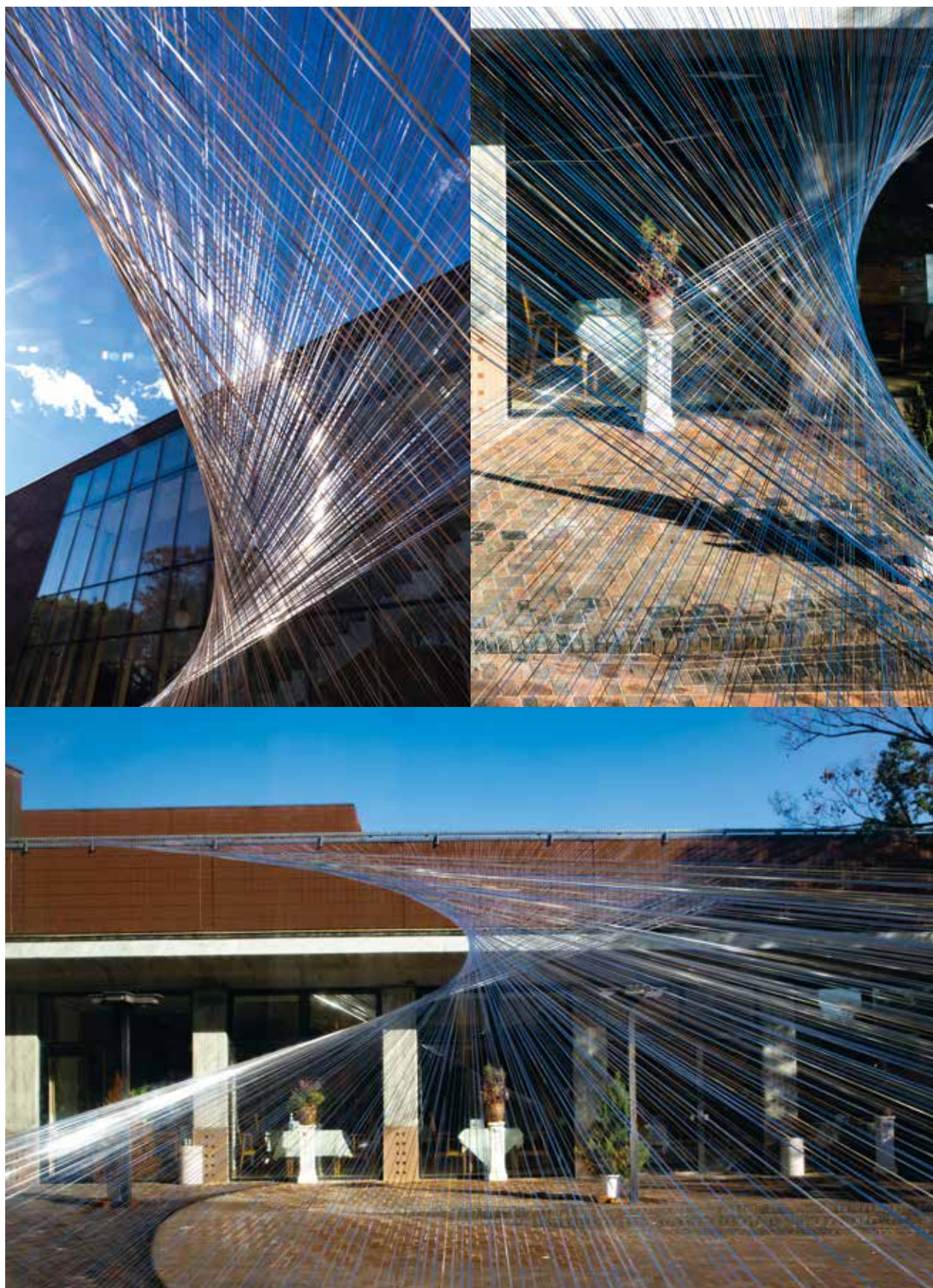


牛乳で雲を描く



作品の上映会

角度や天候によってさまざまな風景が生まれた。



山梨アートプロジェクト 2021

宇田奈緒

《不在の中の在
—Presence in the Absence—》

会期／2021(令和3)年11月23日(火・祝)～12月12日(日)

場所／甲府市藤村記念館

旧・市川大門町出身の作家の祖父の足跡をたどる作品である。宇田は甲府市内のアーティスト・イン・レジデンス 山梨[AIRY]に滞在しながら市川に通い、街の入々の話を聞き、地域でのリサーチを行うことで、祖父と街が歩んできた歴史を追体験することを試みた。その過程を写真におさめ、一つの物語をビデオ作品の中で紡ぐとともに、市川の特産品である和紙に着目、ビデオを投影するスクリーンを制作した。山梨の歴史と地域に生きた個人の歩み、さらにはアーティストとしての自分、会場としての歴史ある甲府市藤村記念館、そして鑑賞者一人ひとりの中で呼び覚まされる物語。時空を静かに横断する、重層的な作品となった。

Presence in the Absence by UDA NaoPeriod: November 23rd – December 12th, 2021

Venue: Kofu City Fujimura Memorial Hall

In *Presence in the Absence*, the artist follows the footsteps of her late grandfather, born in the former town of Ichikawadaimon in Yamanashi. While staying at Artist in Residence Yamanashi[AIRY] in Kofu, Uda commuted to Ichikawa, gathering stories from the community and researching the area. The artist re-experienced her grandfather's life and the history of the town, and documented the process in photographs. The photographs were used to tell a story in the resulting video, which was shown on a screen made with *washi* (Japanese paper), a local specialty of Ichikawa. The story of an individual who lived in the history and community of Yamanashi, the artist herself, the historical Kofu City Fujimura Memorial Hall as the venue, and the stories that come alive in each and every viewer, all come together in this multi-layered artwork, that quietly travels through time and space.



「不在の中の在」を巡る旅

宇田 奈緒

「死んだら全ては無くなるんだと思う」と語っていた亡き祖父の故郷の歴史を辿り、人々の記憶を再構築して作品にするため、私は山梨に2ヶ月滞在した。祖父がそこに住んでいたのはもう70年以上も前のことで、祖父を覚えている人は親戚以外にはいない。私の手元に祖父が遺したのは古いアルバムと、自分史、そして小さい頃から何度も聞いた昔話。そんな条件の中、フィルムカメラを持って町を歩き、生活し、伝統に触れ、皆様と写真や故郷、記憶について対話をする中で、「不在の中の在」と名付けた映像作品が生まれてきた。祖父が自分史で「我が故郷は山々に囲まれ、盆地が一望できる風光明媚なところだ」と描写したその町は今でもそこにあって、それぞれの人が生きてきた歩みがあった。作品をきっかけに人生について語って下さる方々もいた。きっと誰にとっても故郷とは風光明媚なところで、そこで過ごした時間や仲間との記憶はいつでも心の中に存在するのだろう。アーティストの深澤さんの「宇田さんは自分で聖地を作ってそこを巡礼している」という言葉のように、私の巡礼は、目には見えないけれどそこに在るものを求め、これからも続くのだと思う。

Profile



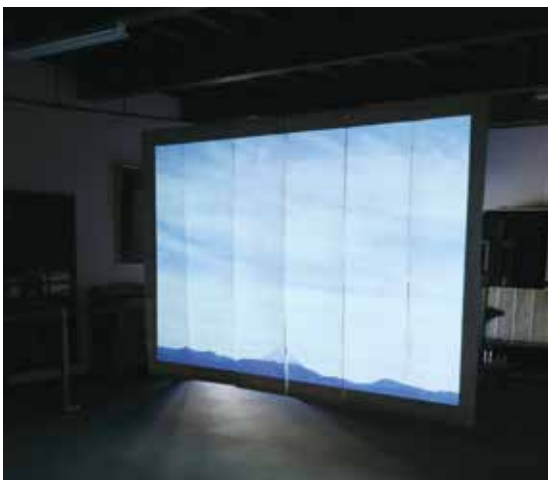
宇田 奈緒 (うだ・なお) UDA Nao

神奈川県生まれ。スクールオブビジュアルアーツ大学芸術学部写真学科 (ニューヨーク、アメリカ) 卒業。国立台南芸術大学大学院造形芸術研究科修士課程 (台湾) 修了。

写真、陶芸、文章を使って、移民や家族の歴史についての物語を保存、継承していくための作品制作をしている。平成26年度ポーラ文化振興財団在外研修員としてカナダにて研修。

／ 展示の様子 ／

祖父の100年近い生涯を想像して執筆した物語の中に、山梨や横浜で数年間に亘って撮影した写真を織り交ぜ、30分の映像作品として映写した。



和紙で作ったスクリーンを裏側から見ると、また違う趣をもっていた。





映像に含まれていた写真の一部

／ アーティスト・イン・レジデンス（滞在型制作）について ／

宇田氏は2021（令和3）年10月から12月まで、甲府市丸の内にあるアーティスト・イン・レジデンス山梨[AIRY]に滞在し、制作した。10月には作品公開前のワークショップを、11月には公開制作（オープンスタジオ）をそれぞれAIRYで行った。公開制作ではAIRY2階のスタジオで制作過程の説明や、今までに制作した作品の紹介などを行い、訪問者と対話した。

／ 関連ワークショップ ／

『不在の中の在を探してみよう』物語編

〔日 時〕 10月30日（土） 午後2:00～4:00 20分入れ替え・全6回制
 〔場 所〕 アーティスト・イン・レジデンス山梨[AIRY] スタジオ／ギャラリー
 〔参加者数〕 5人
 作家との対話の中で、参加者が家族や故郷についての物語を紡いだ。



／ 公開制作（オープンスタジオ） ／

〔日 時〕 11月6日（土）午後2:00～5:00
 〔場 所〕 アーティスト・イン・レジデンス山梨[AIRY] スタジオ／ギャラリー
 〔参加者数〕 11人
 制作過程の説明や、今までに制作した作品の紹介などを行い、参加者と交流を深めた。



アーティスト・イン・レジデンス山梨[AIRY] について

代表の坂本泉氏が2005年に甲府市内で活動を始めた、山梨県初のアーティスト・イン・レジデンス（滞在型制作）で、これまでに36カ国からのアーティストを受け入れてきた。レジデンスプログラムのみならず、地元のカフェ、商店街、元銭湯などでの展示も行うなど、地域のアート活動に大きく貢献してきた。

Founded in 2005, Artist in Residence Yamanashi[AIRY] has so far welcomed artists from 36 countries. Aside from its residency program, AIRY has held exhibitions in various venues, contributing to the art community in Kofu city and beyond.



*

／ 関連ワークショップ ／

『不在の中の在を探してみよう』写真編

〔講師〕 宇田奈緒氏(展示作家)

〔日時〕 12月5日(日) ①午前10:00～ ②午後2:00～

〔場所〕 甲府市藤村記念館2階

〔参加者数〕 6人

参加者が持参した古いアルバムを起点に、作家が用意した質問をととして写真や記憶について考えた。



甲府市藤村記念館について

1875(明治8)年に巨摩郡睦沢村(現、甲斐市亀沢)に睦沢学校校舎として建てられた建物で、1976(昭和42)年には国の重要文化財に指定された。2010(平成22)年には現在地である甲府駅北口に移転し、交流ガイダンス施設として使われている。

Kofu City Fujimura Memorial Hall was initially built in 1875 as Mutsuzawa Elementary School, located in present day Kai city. It was designated as an Important Cultural Property in 1976, before being relocated near the north exit of Kofu station in 2010.

座 談 会

[登壇者] 深澤孝史氏
 藤原隆洋氏
 宇田奈緒氏
 開発好明氏(2020年度展示作家、審査員)
 平野千枝子氏(山梨大学大学院准教授、審査員)
 [司 会] 太田智子(当館学芸員)
 [日 時] 11月27日(土)午後2:00～3:30
 [場 所] 講堂
 [参加者数] 25人
 それぞれの展示作品について紹介をした後、
 審査員のコメントを交えながら制作について語り合った。



座談会の様子はこちらから —————>



交差点としての山梨

平野 千枝子 (山梨大学大学院 総合研究部教育学域 准教授)

当初、“山梨の特徴などを掘り起こし、未来に向けてのストーリーを紡ぐ”という山梨アートプロジェクトの募集内容は、自由な発想に干渉しないのかという不安がありました。けれども実現した作品は、それぞれのアーティストが醸成してきたものから生じていました。このことをよく考えてみると、誰もが応募できるプロジェクトではなかったとも言えます。いってみれば、このプロジェクトにしかない出会いの幸運がありました。

私は枯れてしまった「北池」に鳥の声を聴きながら石の時間に思いを馳せ、記録上映会では調査に参加した人たちの創造性に触れました。

「ミュージアムコート」では、植物のような有機的なものを正確な数字に、そして金属的存在に転換した作品の形に対して、自然と数学の間にある建築の振幅が浮かび上がりました。「藤村記念館」は、人が出ていったり帰ってきたりする駅の前に立っていて、時代を変えることなどできず流転していく多くの人の悲哀と優しさが、せまってきたのです。

アートと旅人効果

坂本 泉 (アーティスト・イン・レジデンス山梨[AIRY] 代表)

プレイベント、エアリー運営経緯を語った講演会、そしてオンライン審査会を経て選出された宇田さんが甲府へやってきたのが2021年10月。リサーチ型制作は自ずと地域の人々を巻き込みながら展開する。作家により準備された丁寧なインタビューは特別な時間だ。受ける方は過去を手繰るようにそれぞれの人生の記憶や思い出を解す。旅人との逢瀬は刹那的でちょっと甘くて特別な関係か、そして人々の心を耕して精神を浄化する効果もあるだろう。一方で作家と山梨の関係はまだ始まったばかり、これからの作家生活にどのように表れるのかを追いつけたい。

今回は初の県立美術館企画の一環として作家を受け入れて、コロナ禍で滞在作家たちの声が途絶えたエアリーに再び灯がともる日、再び街にアートが息づく日を祈りながら熱きアートプロジェクトの日々を過ごした。展示会場となった藤村記念館は明治時代の小学校建築であり、また一つ現代美術展示場として歴史を刻んだことも記憶したい。

あとがき

2020年春、美術館では山梨アートプロジェクトの構想を練っていました。新型コロナウイルスの影響で休館を余儀なくされ、このような状態がいつまで続くのかわからない中、新しい事業を立ち上げることが果たして正しいのか自問自答をしながらの作業となりました。

ソーシャルディスタンスという言葉が突如として日常会話に入り込み、人と会うことが命がけのように感じられる状況下、私たちは「地域の繋がり」をキーワードに、イベントとしてアーティスト・イン・レジデンス山梨[AIRY]代表の坂本泉氏に講演会を、また甲府市出身のアーティスト開発好明氏に作品制作を依頼しました。安全性の確保という今までにない課題に直面しながらも、開発氏の作品《テーブルズ》は多くの方々に鑑賞および参加していただくことができ、美術館を介した地域の繋がりが確実に生まれました。慣れない状況に右往左往する美術館にお付き合いいただき、素晴らしい作品を制作いただいた開発氏にはこの場を借りて心より感謝申し上げます。

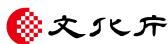
令和3年度には山梨やその土地の特徴や物語、歴史、文化、自然などを掘り起こし、未来に向けてのストーリーを紡ぎだすアートプロジェクトのプランを募集しました。厳正な審査を経て、3つの作品が選ばれました。北池では甲斐市出身の深澤孝史氏による《道祖神リプレゼンテーション》、ミュージアムコートでは藤原隆洋氏による《In the Wind》、甲府市藤村記念館では宇田奈緒氏による《不在の中の在-Presence in the Absence-》を公開、各作品はそれぞれの方法で地域の人々との新たな繋がりを多く創出しました。決して長くはない時間の中で密度の濃い作品を制作した三作家に敬意を表するとともに、審査員を務めていただいた開発氏、坂本氏、平野千枝子氏、向山富士雄氏に感謝申し上げます。

コロナ禍の収束がないまま、2020年度と2021年度のアートプロジェクトは幕を閉じました。特に初期は不要不急とされた文化活動ですが、懸命に作品を制作するアーティスト、そして作品からのメッセージを受け取るたくさんの鑑賞者や参加者からは、アートそして美術館が社会にとって不可欠なものであるという希望を贈っていただいたように感じます。2022年度にはまた新たなイベントを控えています。今後も美術館がたくさんの出会いの場となることを願っています。

2022(令和4)年3月
山梨県立美術館



令和3年度 文化庁
文化観光拠点施設を中核とした
地域における文化観光推進事業



2020 (令和2) / 2021 (令和3) 年度

ご協力者の皆様、誠にありがとうございました。(敬称略、順不同)

開発好明 (展示作家)

坂本 泉 (アーティスト・イン・レジデンス山梨[AIRY]代表)

平野 千枝子 (山梨大学大学院准教授)

向山 富士雄 (南アルプス市立美術館館長)

深澤 孝史 (展示作家)

藤原 隆洋 (展示作家)

宇田 奈緒 (展示作家)

日下 裕 (NPO法人甲府駅北口まちづくり委員会)

写真撮影／提供

青柳 茂 (表紙 [宇田作品以外]、pp. 4-5、12**、14-15、17*、18-21、23)

開発好明 (p.5*)

坂本 泉 (p.10*)

深澤 孝史 (pp.12*、13、16*)

藤原 隆洋 (pp.19*、22*)

宇田 奈緒 (表紙掲載写真作品、pp.24-27、29*)

その他は山梨県立美術館撮影

山梨アートプロジェクト 2020 (令和2) / 2021 (令和3) 年度 記録集

編集 山梨県立美術館 下東佳那・太田智子・雨宮千鶴・成島由季子

制作・印刷 (株)島田プロセス

発行 山梨県立美術館 ©2022

Yamanashi Art Project 2021/2021 Document

©2022 Yamanashi Prefectural Museum of Art